



大図研京都ワンディセミナー 終了しました

テーマ：『RDA 講習会 in Kyoto』

概要：英米目録規則 (Anglo-American Cataloguing Rules) は「AACR3」に改訂されるのではなく、新たな FRBR、FRAD、FRSAD の概念モデルを基に、2010年にまったく新しい枠組みの RDA (Resource Description & Access) として刊行されました。すでに LC (Library of Congress) や British Library など世界有数の図書館が 2013 年 4 月から RDA 準拠に変わっています。国際標準の動向として、図書館員は RDA とはどのようなものかを知っておく必要があるでしょう。IAAL (大学図書館支援機構) が東京で 3 回連続講座として実施した講習内容を、今回は 2 回の連続講座として開催します。

開催日時：第 1 回 2014 年 2 月 22 日 (土) 13:30-16:30
第 2 回 2014 年 3 月 9 日 (日) 13:30-16:30

会場：京都市国際交流会館 第 1・第 2 会議室
(京都市営地下鉄東西線「蹴上」駅下車 徒歩 5 分)

定員：各回 66 名

共催：IAAL (大学図書館支援機構)

[目次]

大図研京都ワンディセミナー 終了しました	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー「若手研究者の文献利用環境を巡る問題と図書館へのニーズ」参加報告		
若手研究者からの要望に大学図書館界はどう応えるのか	三本木 彩	… 2
大学や公共といった館種を超えて図書館ができること	中村 直美	… 3
若手研究者という“新たな”サービス対象者	川崎 千加	… 5
わたしの図書館紹介します！ 「京都大学農学部図書館」 小松原 記子, 西川 真樹子	…	7

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集:大図研京都ワンディセミナー
「若手研究者の文献利用環境を巡る問題と図書館へのニーズ」参加報告
若手研究者からの要望に大学図書館界はどう応えるのか
三本木 彩

1月25日にキャンパスプラザ京都にて開催されたワンディセミナー「若手研究者の文献利用環境をめぐる問題と図書館へのニーズ」に参加しました。大学図書館問題研究会京都支部と日本図書館研究会の合同開催となっています。

今回のセミナーは2013年3月に発表された「西洋史若手研究者問題アンケート結果・中間報告」とカレントアウェアネス(以後CA)に掲載された「若手研究者問題と大学図書館界—問題提起のために」を題材とした発表でした。前半は千葉大学普遍教育センターの崎山直樹氏による発表「若手研究者問題と大学図書館への期待」、後半は国立国会図書館関西館の菊池信彦氏による発表「若手研究者問題と(大学)図書館界」、その後質疑応答時間が約1時間設けられました。自分自身が史学系出身で現在も文系の図書館勤務のため、身近な話題と感じて参加してきました。

まず前半の崎山氏の発表は若手研究者問題の変遷、アンケートを行った西洋史若手ワーキンググループの説明、大学図書館に期待したいことという3つの柱で構成されていました。若手研究者問題の変遷は80年代から現在までの若手研究者が置ける状況がまとめられていて、とても分かりやすかったです。西洋史分野における科研費の申請額に注目して、基盤研究の採択が減少しており若手研究者問題からさらに後継者問題へと発展するのではないかという指摘は新鮮でした。また今回のアンケートは西洋史分野で行われたアンケートでしたが、今後歴史学全体に広げてアンケートを実施する予定とのことでしたので期待しております。

大学図書館に期待したいこととして、研究支援の面ではレファレンスやデータベースの学外者利用や学会誌の電子化支援、コンソーシアム加盟館の拡大等、教育支援の面ではカレント教育の拠点としての機能や若手研究者への教育機会の提供、教材開発を含めた電子化資料の取り扱い指導等を挙げられていました。若手研究者の方に対して教育支援が必要だというのは考えていませんでした。「研究が弱い大学への就職を躊躇してしまう」「大学から離れると当たり前のことができなくなる」という言葉が印象的でした。

次に後半の菊池氏の発表はアンケート調査結果から研究環境部分の紹介とCA記事に対する批判への回答となっております。

アンケートの回答者の属性を大学院生・非常勤講師・研究機関研究員・大学教員・その他と分けると、経済面や文献収集の環境という項目で非常勤講師やその他の回答者の不満が高いという結果でした。その他というのは会社員や家庭に入った人・高校教員とのことでしたので、研究機関に属していない在野の研究者です。就職したとしても研究者としては大学院生よりも厳しい状況に追い込まれるというのは意外な気がしました。

CA記事に対する批判として、予想通り「若手研究者への支援は大学図書館ではなく公共図書館の仕事ではないか」という声が多かったと紹介されました。私自身もCAを読んだときはそう思いました。この批判に対して菊池氏は「記事では若手研究者のキャリアパスの実情に制度が合っていないので、制度を現状に合わせるべきではないかと指摘しており、学外者に対するサービスは公共図書館の領域であるという批判は制度自体を問題にしている記事を理解していない」と答えていました。またCA記事タイトルを「若手研究者問題と大学図書館界」としたのは、単館の図書館としてではなく図書館「界」

へ期待しているからだと仰ってました。学外者利用を認めている大学図書館は多いが ILL サービスは閉じられたままで、図書館の強みであるはずのネットワークを活用できないのが問題とも指摘されており、単館だけでは解決できない問題の解消を求められていると感じました。

最後の質疑応答では、大学図書館だけでなく公共図書館からの参加者、研究者からの意見が聞かれました。ILL サービスの話題が出たことで、学外者の ILL を受け付けている館はあるかという問いが会場で出ましたがやはり少なく、可能なところも卒業生や共同研究者などで学内教員の許可が必要ということでした。公共図書館と大学図書館で ILL のネットワークが繋がっていないという指摘もありました。

また研究者の方からの「郷土資料等で公共図書館を利用する機会のある日本史の研究者に比べ、西洋史の研究者はもともと公共図書館を利用しないので、公共図書館への利用にハードルを感じる」という意見は新鮮でした。使い慣れた図書館を利用し続けたいと思ってもらえるのは大学図書館としてとてもうれしいことで、その期待に応えられるようになりたいと思いました。

今回のセミナーに参加して、大学図書館はまだ本来の利用者である学生・教職員でのサービスが不十分であり、それ以外の学外者へのサービスは時期尚早と考えているのではないかと感じました。また有料の利用証を導入する意見が出ていましたが、有料利用者や私費での ILL が増えることによる会計的な業務が増加することを懸念して躊躇してしまう図書館は多そうに思えます。

若手研究者の内、卒業生の利用という面だけでいえば、キャリアサポート部署との連携や同窓会組織からの支援を得ればサービス拡大は可能になるし、実施している大学もあります。まずは若手研究者を学外者ではなく「将来のお得意さん」と考えるところからではないかと感じました。

大学図書館に所属する一員として、今回の若手研究者から寄せられた要望にどのように応えるべきかを考える貴重な機会となりました。今度は西洋史分野だけでなく他の分野の若手研究者のご意見も聞きたいところです。

さんぼんぎ あや (京都大学文系共通事務部総務課受入掛)

小特集:大図研京都ワンディセミナー

「若手研究者の文献利用環境を巡る問題と図書館へのニーズ」参加報告

大学や公共といった館種を超えて図書館ができること

中村 直美

新年最初の大学図書館問題研究会京都支部ワンディセミナーは「若手研究者の文献利用環境を巡る問題と図書館へのニーズ」をテーマに開催された。

最初に千葉大学普遍教育センターの崎山直樹氏から、1980年代から始まるオーバー・ドクター問題、ポスト・ドクター問題、その後のポスト・ポスト・ドクター問題へと変遷する日本の若手研究者が置かれている研究環境の推移と昨年実施した西洋史若手研究者問題アンケート結果の概要説明があった。崎山氏は、若手研究者が大学図書館へ期待することとして、2つの図書館機能に対し期待していると提起があった。1つは研究支援機関としての大学図書館(①提供するレファレンスサービスや提供するデータベースを若手研究者へ開放すること、②学会誌の電子化、オープンアクセス化の支援、③コンソーシアムの拡大、ポータルサイトの構築)であり、もう1つは教育支援機関としての

大学図書館（①リカレント教育の拠点として若手研究者に（就業場所としての）教育機会の提供）であった。

続いて国立国会図書館関西館の菊池信彦氏から、西洋史若手研究者問題アンケート結果から「大学教員は経済的には比較的余裕があるが、学事等で研究時間がない。他方で非常勤講師は、経済面・文献利用環境・研究会参加・研究時間のどれも困難な立場である。」と報告された。続いて菊池氏から、同氏が提供したカレントウェアネス記事（CA1790）に寄せられた意見の紹介とそれに対する自身の考えを述べられた。最後に菊池氏はアンケート結果から、資料入手環境は人文系若手研究者にとって切実な問題であること、今回の問題は大学図書館の意義を発信するための機会と捉えてほしいこと、支援のあり方は多様／単館ではなく「界」に求めること、若手研究者を取り巻く問題にとって図書館アクセスの問題は「小さな問題」であるが、大学図書館としては取り組みやすい問題であるとの認識があるとの考えが述べられた。

お二人の講演のあと、講師と会場参加者との間で質疑及び意見交換が行われた。大学図書館員の立場からは、若手研究者が大学図書館へ期待することは理解するが、各大学により事情が違うことから図書館協会等団体での一律な対応が難しいこと、制度上構成員でない利用者に対し図書館サービスを提供することが困難であること、地域の公共図書館が若手研究者を支援することを期待したいなどの意見が出された。

公共図書館の立場からは、必要とされる図書館サービス（特にレファレンスサービス）の提供が専門的であり提供が困難であること、大学図書館に対して相互利用制度により資料の貸借・複写ができることは理解するが利用料金の精算といった技術的な課題もあり敷居が高いと感じること、専門的な研究で必要な資料は、公共性があまりないことから自ら購入すべきとの意見が出された。

また大学図書館の中でも、在野の若手研究者に対して、図書館サービスを提供している大学図書館もあることや、他方で在野の研究者からは公共図書館を使った専門資料を上手に入手する事例が報告された。さらに今回の件に限らず大学図書館と公共図書館との館種を超えた連携を模索する考えがあるといった、多様な意見が交換された。

進行者の方から、大学図書館あるいは公共図書館といった館種を超えた多くの参加者の方々との間で、若手研究者の文献利用環境を巡る問題が共有できたことが最大の成果であると今回のセミナーのまとめが行われた。

現在の大学図書館は、平成 22 年 12 月公開の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）ー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー」で取り上げられているように、学士課程教育を重視する学習支援活動あるいは教育活動への直接関与する施策が強く進められている。具体的には施設面でのラーニング・コモンズの設置であり、サービス面では図書館における情報リテラシー教育の拡充や「レポート・論文などの文章技法」等の講習会開催などである。他方で、前述の「大学図書館の整備について」には、今後の研究活動支援として、電子ジャーナルの拡充や機関リポジトリによる学術情報流通の促進を促している。現状として、今回のセミナーで問題提起された若手研究者の文献利用環境は、顕在化されていない問題といえよう。

セミナーの意見交換のなかで、若手研究者に対して図書館サービスを提供することは、実は図書館のためであるとの見解を示した方がいた。大学図書館のサービスを享受できた若手研究者は、大学図書館の良き理解者であるだけでなく、いずれ大学教員となって戻ってくる可能性がある。報告者の経験上、そのようにして大学に戻ってきた教員は、その大学及び大学図書館の良き協力者で、大学及び大学図書館が主催する各種行事や学事などに積極的に参加している。「情けは人の為ならず」ではないかと考える。

今回のセミナーは、日本図書館研究会との共催ということで、館種を超えて公共図書館関係者の方々も多数参加されていた。今後は図書館だけでなく、博物館、美術館ある

いは公文館といった、いわゆる MALUI 連携 (M (M: Museum, A: Archives, L: Library, U: University, I: Industry)) を視野に入れた研究会の開催が望まれるのではないかと考える。

報告者は、大学図書館問題研究会では愛知支部に所属するものであるが、毎回興味深いテーマが開催される「大学図書館問題研究会京都支部ワンディセミナー」へ参加させてもらっている機会が多く京都支部の皆様へは大変感謝している。この場をお借りしてお礼を申し上げさせていただきます。以上

なかむら なおみ (愛知大学名古屋図書館)

小特集:大図研京都ワンディセミナー

「若手研究者の文献利用環境を巡る問題と図書館へのニーズ」参加報告

若手研究者という”新たな”サービス対象者

川崎 千加

1. はじめに

オーバードクターやポストクの就職難、「高学歴ワーキングプア」といった言葉がメディアでも取り上げられるようになった。今回のテーマはそうした社会情勢とも関連したものである。「若手研究者」に限らず、研究業績を上げたいのに、非常勤であるためにその環境が時間的、空間的、経済的に維持できない状況に置かれている人が増えている。学校基本調査 (2013) では、2005 年以降、兼務教員数が本務教員数を上回っている。非常勤率は 50% を超えている大学も多いとされる。また、契約年限が 3-5 年で更新しない、文科省的には専任に見える特任講師といった雇用契約も増加している。こうした教員の雇用形態の多様化によって、研究基盤が不安定な研究者は今後も増え続けるだろう。

今回の報告でも指摘されたように、若手研究者の多くが不安定な雇用形態で生計を立てている。非常勤講師は筆者自身も経験しているが、時給 1000 円の飲食店などのバイトに比べれば、90 分授業で 6000 円程度を頂ける楽な仕事、と思う人も多いかもしれない。しかし、非常勤講師だけで生活するには週に 10 コマ持っても年収は 200 万程度しかない。週 10 コマも持てばその準備や採点、学生の指導、掛け持ちだと移動時間もバカにならない。週に 1 日だけしかその大学には行けないで掛け持ちでもしていると、図書館に立ち寄る時間も限られてくる。そうすると研究者と言えるような研究時間を確保できるのは一握りだと思う。社会保険もなく昇級や退職金などは当然ない。専任教員との格差は大きい。時間と収入、その上頼みとなる図書館の利用に制限があると、研究者としての環境は一層厳しい。今回は西洋史学研究者、人文系に焦点を当てた発表であったが、非常勤講師の増加を見ても西洋史に限られる問題でもない。

2. 図書館への問題提起

崎山氏と菊池氏の今回の発表では、西洋史という限られた研究領域を対象とし、文献利用環境に視点を当てて若手研究者の研究基盤の現状を示された。菊池氏はアンケートを元に非常勤講師などの研究環境の厳しさ、博士課程修了後に所属大学を持たずに研究を続ける難しさについて述べられた。崎山氏は新自由主義による学術領域の影響を視点として、西洋史学に留まらない教員の雇用崩壊による流動化が、引いては大学教育全体の弱体化にも繋がるという懸念も示されたと思う。その上で、文献利用を支えるべき図

書館の利用に関する壁に触れ、問題提起がなされた。

西洋史学という現物に当たること、網羅的な文献情報に当たる必要がある研究領域において、図書館のデータベースが使えない、ILL が受けられないことは研究を続ける上で致命的である。そして非常勤講師の不安定な雇用では、いつでもこの研究基盤を失う可能性がある。もちろん、エビデンスが求められるのは研究領域に関わるものではない。非常勤講師として在職中は、毎年度利用更新を申請すれば図書館のほとんどのサービスは利用できる。一方で非常勤講師は ILL を断っている、データベースの利用に制限を設けている大学図書館もあるという。非常勤講師は学外者扱いだという。

何故そうなっているかは、学部や大学自体の方針にもよるようで、経営が厳しい中、非常勤が「学外者」であるとしたら、学内者のサービスとの差異は当然出てくる。学部長等への申請を求める大学も多く、教員は常に大学にいるとは限らず、手続きに時間がかかることもある。図書館が申請先であったとしても館長許可を得なければならないなど、煩雑さがあることがわかった。筆者は小さな私立大学の図書館にいたので、特にこんな手続きの必要はなく使って頂いていた。ILL は実費だが複写料金は所属学部の負担となっていた。退職した教員は複写料金も実費だったが、利用のための申請などは無料で行っていた。顔が見える人数だったからできたことだとは思いますが、せめて在籍中の非常勤なら利用許可は図書館が決定できれば、多少は迅速な対応ができることになる（全面委託の図書館ではそうはいかないが）。

3. 研究費の不足

今回の報告でよりシビアな問題はやはり研究費の不足だったと思う。大学は非常勤をそもそも「研究者と認めていない」という指摘もあったが、採用時には研究業績も問われるし、その研究領域が教育と結びついているのは採用になっているはずである。学生の学習支援としての指定図書やリクエストはできても、研究のための資料や文献は学部教員から要請してもらうしかない。その頼れる専任教員がいない場合もでてきている。一部の大学では科研費が取れるように非常勤講師にも 研究者番号を配布するところが出てきているという。しかし、各大学から個人研究費が支給されるわけではないし、崎山氏も指摘されたように「お金に繋がらない」人文系で科研費が取得できるのはごく一部の研究者であろう。そしてこれももちろん「期限付き」である。

また、所属を失ったとき、学外者としての利用申請が有料だとしたら、利用をためらわざるを得ない人もいるだろう。必要な時だけ必要なサービスを受けられるなら、その方を選択する人もいると思う。定年退職後の非常勤なら貯えもあるだろうが、最初から研究者の道に入った場合はそうもいかない。会場からはデータベースも個人で契約できるものもあると言った助言もあった。しかし、非常勤講師は大学教員という耳ざわりの良い職名を持っているが、崎山氏の報告にあったように、その多くは年収 200 万前後の非正規労働者でもある。所属する学会費を払うので精一杯で、年間何万も払ってデータベースを個人で契約できれば苦勞しないだろうと思う。

また、所属がないなら公共図書館を使うことが考えられるという声もあった。確かにそれは理想である。公共図書館は生涯に渡る個々人の学習を支える、調査・研究の支援もするとされている。しかし実態としてそんなことができるのは、国立国会図書館や都道府県立、ごく一部の中央館だけだろう。市町村図書館では一般的な新聞記事データベースすら備えていないというところが少なくない。まして、専門的な文献データベースや電子ジャーナルを公共図書館に求めるのは現状では難しい。何より週何コマも持つ非常勤講師をしていれば、公共図書館に行く時間を確保するのも厳しいのではないだろうか。公共図書館でも NACSIS-ILL ができれば良いといった意見もあったが、Web 環境も違えば支払方法なども異なり、相互の壁を乗り越えるにはかなりの調整が必要だ。

4. まとめ

今回は大図研京都支部のワンディセミナーと日本図書館研究会の第 302 回研究例会

との合同開催であった。そのため、大学図書館だけでなく公共図書館や研究者の参加もあり、異なる視点から意見が出て良かったと思う。菊池氏のカレントアウェアネス第315号が出るまでは、非常勤やポスドクといった非正規の研究者の図書館利用について考えることはほぼなかったのではないかと思う。大学図書館にとっては、関心外だったというか、問題として取り組む図書館員はあまりいなかったのではないだろうか。その意味で、菊池氏や崎山氏の研究は図書館に対し、重要な問題提起をされた。また、今回の合同開催では、公共図書館にとってもこうした専門的な研究支援のニーズを持つ人が、新たなサービス対象となることを考えるきっかけになったと思う。

大学図書館にとっては、まずは非常勤を研究者として扱う意識改革が必要なところもあるのかもしれない。一方、そもそも非常勤教員の中には、勤務先の大学図書館が使えることを知らない人もいるのではないかと、という疑問が生まれた。知らないことはないにしても、非常勤先の図書館は何となく敷居が高く感じたりもする。各非常勤教員に「利用できます」といった呼びかけを大学図書館は積極的に行って来てはいると思う。筆者も複数の非常勤先を持っているが、非常勤講師室に利用登録の呼びかけが掲示されていた大学は1か所だった。職員は減少し、多忙さが増す中で敢えて「学外者」まで呼び込む必要はないのかもしれない。しかし、ライブラリアン魂は、困っている人がいれば手を差し伸べる give & give の精神にあるはずである。

大学図書館と公共図書館、いずれも予算が削減され人員確保も難しいからこそ、連携がもっと広く模索されても良いと思う。そこでは、事務的な処理の違いに限らず、理解のない設置母体や他部署をどう説得するかといったマネジメント力も必要になる。これから益々研究者の雇用は流動化する。今や大学によっては非正規雇用の研究者の方がマジョリティーになりつつある。そうした研究者の支援は、新たな知的創造物を生み出す上で不可欠であり、知的生産を支えるという図書館の役割に立ち返れば、見逃してきた新たなサービスの展開に繋がるのではないだろうか。

以上

かわさき ちか (大阪女学院大学・短期大学)

連続企画:わたしの図書館紹介します!

紹介番号 5 京都大学農学部図書室

小松原 記子ときどき西川 真樹子

1.ごあいさつ

京都大学農学部図書室に勤務しております、小松原記子と申します。私が、農学部図書室に勤め始めてから、ちょうど一年が過ぎました。それまでは、学生でしたので、農学部図書室は、私の初めての勤務先です。新人歓迎会で、「最初の勤務地はとても印象に残る」と先輩方がおっしゃっていましたが、そうなるだろうかと予感させられる、濃い毎日を過ごしております。今回、思いがけず、大図研の京都支部報に執筆する機会をいただきましたので、僭越ながら、私がこの一年間を過ごした農学部図書室についてお話ししたいと思います。紙幅の都合上、「図書展示」と「Facebook」に関する内容が主となりますが、ご容赦ください。

2.農学部図書室と私の業務について

農学部図書室は、京都大学北部キャンパスにあります。キャンパス内は、田んぼや畑や植物園があったり、馬術部の馬が闊歩していたり、とてもどかな環境です。農

学部図書室も、落ち着いた雰囲気、主に農学研究科や理学研究科の学生に利用されています。ご参考までに、概数値を挙げておきますと、座席数 100 席、所蔵資料 27 万冊、一昨年度の入館者数 6 万 8 千人、貸出冊数 1 万冊となっています。

私自身は、学術情報掛に所属しており、閲覧サービスを担当しています。カウンターでの利用者対応や、ILL が主な業務です。通常の業務に加えて、講習会や展示の企画運営、Facebook や HP を通じた広報活動などにも携わっています。次の節からは、農学部図書室の新サービスとして、一年ほど前から始まった図書展示と Facebook について、お話します。

3. 図書展示のこと

3.1. 今まで開催してきた展示

農学部図書室では、定期的に図書展示を行っています。この原稿を執筆している 2014 年 4 月現在、4 回目の展示を開催中です。第 1 回目の展示は、2013 年 1 月に行われました。ある研究室から寄贈図書をたくさん頂き、せっかくなら展示しようということで開催されたのですが、好評だったこともあり、継続することになりました。内容も時期にあったものを心がけ、第 2 回目の 4 月は新入生にお勧めする図書を、第 3 回目の 8 月は、後期に 3 回生が研究室選択を行うので、研究室紹介と絡めた図書を、第 4 回目の 4 月は、新入生が受講する全学共通科目と関連した図書を展示してきました。

3.2. 展示のメリット

展示にはいくつかのメリットがあります。一番のメリットは、なんとといっても、利用者に「本との出会い」を提供できることです。青臭い話ですが、展示した本を利用者が手に取って読んでくれている時に「図書館職員になってよかったな」としみじみ思います。もともと、私は展示にさしたる興味を持ってはいませんでした。展示がなくても、読みたい人は自分で本を見つけるし、読みたい人だけが図書室の本を利用すればいいのではないかと思っていました。しかし、展示架に陳列して、本の表紙を見せるだけで、手に取ってくれる人が、飛躍的に増えるという現象を、目の当たりにすると（農学部図書室では、展示架がカウンターからよく見えるのです）、展示の効果を否定することはできなくなりました。図書展示は、今後も積極的に行いたいと思っています。

2 つ目のメリットは、先生方や学生さん、他の事務職員の方と関わりができることです。第 2 回や第 3 回の展示では、農学研究科の学生や教員の方々に、図書の推薦をお願いしました。第 4 回目は、先生方から図書を推薦していただくことに加えて、教務掛の職員の方にも、全学共通科目のシラバスを前もって提供していただくなど、協力をお願いしました。協力してくださった方々とは、展示を機につながりができることとなります。一度、つながりを持っておくと、他の場面でも、いい作用があるのではないかと思います。

上記に加えて、展示にはやや政治的(?)なメリットも存在します。それは、色々な方面に図書室の存在をアピールできることです。図書委員会で先生方に協力を仰いだり、専攻事務室（農学部は専攻ごとに事務室があります）を回って、展示のポスターを掲示してもらうようお願いしたり、図書系職員でない上司に展示の報告をしたりすることで、図書室は積極的に活動しているという印象を持ってもらうことができます。ともすると、存在を否定されかねない理系の図書室にとっては、自室の活動をアピールするのは非常に大切なことです。

とはいえ、展示の醍醐味はやはり、利用者に本をお勧めできることです。カウンターで「この本おもしろいですよ」とは言いづらいですが、展示架のコメントカードではそれができます。展示架は利用者とは会話できる貴重な場所だと思っています。

4. Facebook のこと

京都大学農学部図書室といえば、知る人の間では、Facebook が有名ではないでしょうか。Facebook は、2013 年 1 月に第 1 回目の展示と時を同じくして、スタートしました。私はまだ配属される前ですので、この辺りの事情については、発起人である西川真樹子先輩にお話しいただきたいと思います。

ご紹介に預かりました、同じく農学部図書室整理掛の西川真樹子と申します。ご指名の Facebook 立ち上げ当初のお話をさせていただきます。

お話は 2013 年 1 月にさかのぼります。当時、図書室で「お肉の祭典」という企画展示を行うことになりました。農学部図書室では、私の知る限りでは初めての企画展示だと思います。これをそれまで農学部図書室で使ってきた HP や室内の掲示板といった従来のメディアだけではなく、この際だから、新しいことを新しいところで広報したいと考えました。ちょうどその頃、いくつかの学内の図書館/室では Twitter の運用が開始されていました。それなら、「農学部図書室は何するの?」「Facebook でしょう」ということで、ページ開設したのが企画展示開始直前の 2013 年 1 月 25 日です。

ページ開設にあたっていくつか準備したことがあります。1 つ目はターゲットを設定し、農学研究科所属の院生や教員としたことです。理系大学院の図書室では電子ジャーナルの管理さえしていればよく、物理的な図書室と接点を持つことは少なく、図書室のサービスが知られないこともままあります。そういった理系の院生・教員に図書室を PR するのがひとつの目的でした。

2 つ目はポリシーの策定です。Facebook に限らず、企業や組織が SNS 運用する際にはポリシーやガイドラインを策定することが多いのですが、日本の図書館の SNS を見てみると、運営母体によらず、ポリシーを策定し、外部に公開しているところは多くはありません。SNS 運用ポリシー策定をすることで、運用側から言えば、

- a. 「炎上」といったトラブルに巻き込まれない
 - b. SNS 上での削除規定を含めることで、ユーザからの不適切な書き込みを削除できる
 - c. SNS の担当者が変わっても、同じ運用で続けられる
- といった、目的や効果が見込まれます。

ユーザ側からは、

- a. SNS を運用する企業や組織が目指すコミュニケーションがわかりやすい
 - b. 安心感がある
- と言えると思います。

その当時、京都大学の公式 Facebook ページは試行運用中で、SNS での情報発信についての規定もありませんでしたので、いくつかの企業の運用ポリシーを参考にして作りました。

こうして、始まった農学部図書室の Facebook ページですが、今は主に 3 人のチーム制で運用しています。Facebook の特徴のひとつである写真を多用し、図書室キャラクターの「ピエール」や「シャモーネ」を登場させたり、新人図書館員「こまっちゃん」が奮闘する様子を載せたりして、ユーザの皆さんに楽しんでもらえるページを目指しています。

では、「こまっちゃん」にお返しします。

5. むすび

配属されてから一年。失敗やうまくいかないことも多くありますが、それも含めて、充実した日々を過ごしております。最後になりましたが、このように農学部図書室を紹介する機会をいただいたことに、感謝いたします。お読みいただき、ありがとうございました。

以下に Facebook と HP の URL を載せておきます。興味を持たれた方は、ちょっとのぞいていただくと、幸いです。

なお、Facebook に登場する「こまつちゃん」はアイコン的な存在であり、実在する小松原とは異なります。生身の小松原に会って、がっかりされませんよう、よろしく願いいたします。

農学部図書室 Facebook <https://www.facebook.com/agrilibku>

農学部図書室 HP <http://www.agril.kais.kyoto-u.ac.jp/index.html>



閲覧室



お待ちしております

こまつばら のりこ／にしかわ まきこ (京都大学農学部図書室)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に 2013 年度 (大図研会計年度 2013.07 - 2014.06) に入っておりますので、2013 年度の会費の納入をお願い致します。また、2012 年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000 (大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000) です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (kyoto@daitoken.com) まで。